

## 令和4年度第2回鎌倉市青少年問題協議会 議事概要

【日 時】 令和4年10月27日（木）10時30分から12時00分まで

【場 所】 鎌倉市役所 4階402会議室

【出席者】 敬称略

(1) 委員 11人

別紙名簿のとおり。

(2) 事務局 6人

小林青少年課長、田中担当係長、山下職員、渡邊職員、西田職員、平野インターンシップ生

【資 料】

1－(1) 青少年問題協議会委員名簿

1－(2) 令和4年度中高生アンケート調査の集計結果

1－(3) 方針策定に係る資料

【議 題】

(1) 令和4年度中高生アンケート調査の集計結果について

(2) 居場所づくりの方針について

(3) 次回開催について

概要については以下のとおり。

(1) 事務局挨拶・自己紹介

・青少年課長の挨拶ののち、各委員が自己紹介を行った。

(2) 令和4年度中高生アンケート調査の集計結果について

・事務局から、令和4年7月に実施した、令和4年度中高生アンケート調査の集計結果についての報告を行った。

(3) 青少年の居場所づくりの方針

・事務局から、今年度中に「青少年の居場所づくりの方針」について策定する予定であることを説明した。

・青少年課で整理した「居場所づくりの方針」に今後記載する内容について説明した。

(4) 今年度のスケジュールについて

・事務局から、次回の青少年問題協議会の開催予定について説明した。

各委員からのご意見、ご提案は次のとおり。

### 【中高生アンケート質疑応答】

加藤会長：アンケートの結果報告を受けて、意見があるかと思うので、是非積極的に発言  
いただきたい。

林委員：このアンケートは中学校一年生から高校三年生まで混じっているものか。

田中係長：混じっているものである。

加藤会長：子ども達の居場所は、自宅と学校がまず二つ。第三の居場所として、もう一つ  
違うところでどんなところを求めているかを今回明らかにしたい。

千代委員：令和4年度のアンケートということだが、これはどういう形で、いつ取ったア  
ンケートか。

渡邊職員：時期としては今年度の7月。二週間程期間を設けて、二次元バーコードを記載  
した用紙を中学校と高校に配布し、インターネットから回答していただいた。

加藤会長：夏休み前後に、子ども達が直接二次元バーコードから回答したということであ  
る。他に意見はあるか。

川島委員：方向性としては同意する点が多かったが、学校という場を選ばなかった子ども  
がどう生きていくかというところの意見だとか、第三の居場所的などころも知  
れるといいなと感じた。

加藤会長：わずかだが、無回答だとか否定的な意見がある。その子どもたちは学校や家に  
居場所がないのかもしれない。その子どもたちが何を求めているかをもう少し  
引き出せるといいという考えだろう。

石井委員：このアンケート結果からなんとなく想像できるのは、複数の仲のいい友だちと  
集まって談笑したり、お互いに情報交換したりというようなイメージが浮かん  
でくるが、このアンケートの中で少数ではあるがこういった関係が見られない  
子どもがいると思う。そういう子どもはもしかしたら学校でも孤独を感じてい  
たり、家庭でも居場所がないかもしれない。誰かに相談できる場所があるとい  
いなと思う。

幅委員：多数の意見を注目するよりは、少数派の意見を注視するべきだと思う。居場所  
を作るという話だが、本当は心の拠り所を求めてる子どもが多いかなと思う。  
なんでもネットでできる世の中になってしまっているのも、もし第三の居場所  
を実現できるのであれば、人と人との間でコミュニケーションをとれる場であ  
ったほうがいいと思う。世代を超えて交流できる場が必要なのではないかと思  
う。

加藤委員：相談はしたくない、大人はいらないという意見がある。中高生だけが集まる場  
所ではなく、もう少し違ったコミュニケーションをとれるといいということだ  
ろう。

平野さん：自分達の年代のことを考えてくれるこのような場があること嬉しい。実際この  
ようなことが行われているのが当事者に伝わっていないので、そういうのを伝  
えていかないといけない。問題協議会のような話合いがあるということ当事  
者たちに伝えて、すり合わせができるといいと思う。自分たちとの世代と異な

る大学生、大人との交流の話しについて、最近思うのは同世代と競争させられていて、且つ常に社会と結びつけられて色々考えさせられる機会が多くなっている。私自身受験生であって、競争させられている意識がある。逆に自分と世代が離れた場に来ると評価されることは少なく、居心地が良い、実社会を忘れられる環境である。社会貢献であったり、具体的な社会と結びつけられた評価というのも与えてあげることが大事である一方、仲の良い友だちとゆっくりと会話できる空間、場を用意してあげることも大事なのでは。

加藤会長：子ども達同士で話すともっと違った側面が出る。共通ではなくいろんな階層の子ども達、同士が話すときんな要求の要素が出るかもしれない。今後の課題である。

千代委員：考察について違和感がある。第三の居場所があるかという設問はあったが、第三の居場所が欲しいかという設問がなかった。前提が第三の居場所を作ることになっている。それでいけば第三の居場所に向けて考察された結果になる。果たして中高生が思っていた内容になっているのか。結果として一人でいられて、複数でいられて、Wi-Fiがあつて、飲み物があつて、それはお子さんだけではなく大人にとっても居心地の良い場所なのでは。それだけではなく少数意見、数字からだけではなく、漏れてしまっているところも考察していつて見えてくるところ。中高生にアンケートをとってその回答とすり合わせて出てくるものを検討することも一つのやり方だと思う。これだけだと物足りないと思う。

河合委員：充実している人たちのアンケートになっている。不登校になっているような子たちが大人になっていく時に、居場所というところで困るということはある。

若木委員：居場所というのは赤ちょうちんで、そこに行くとき誰かがいる、何かがあるというような場所。スポーツ課の中で海のイベント事業がある。それに参加した中学生がサーフボードに興味を持って材木座のサーフィンのスクールに通い始めた。その子が世界選手権までいくようになった。その子にとっては赤ちょうちんがサーフショップ。一方で音楽をやりたい子は、施設にある音楽活動をしている。心のよりどころ、安心できる場所。やんちゃな子は集まる場所がある。一つの箱というのではなく、鎌倉市内にはあらゆるところが用意されている。赤ちょうちんが並んでいる。私たちのころは昭和45年に鎌倉青少年会館ができて、美術、音楽等の専門職がいた。今指定管理制度になってしまいそういう事業が減ってきている。あの人がいるからそこに行きたい、行ってみたいという気持ちがある。そういうところも大切にしながら指定管理者の選考の中でその視点も必要。

下山委員：体験型の活動をしている中で、例えばジュニアリーダーズの活動がある。学校の中では違う、というお子さんもそこに入った時、安心できる大人がいる。そこでいろんなことをお話してくれる、そこに行くとき誰かがいる。自分の夢が見つからない、自分が好きじゃない、何をしたらいいのかわからないというこ

と。体験のところやってみようか、好きかも、これやってみたいかも、とっかかりがいろんなところで繋がっていく。地域の子育てを作った時、地域の大人がどんどん入っていきながら、中高大生とお話ができ、それにつながっていただけたい。箱ではなく人間の心と心。それをどうやって繋げたらいいのかというのが第三の居場所ということになると思う。そこが分からないからこの話が出ている。それは取り残した子どもたちも一緒。今コロナ禍で言語力が減っている、どうやって繋がっていいかわからない。どう自分を表現していいかわからない、というお子さんが結構いた。入口を作ってあげないと入ってこれないのではと思う。それが第三の居場所になるのではと思う。

平野さん：居場所は人によって違うと思う。たまたま僕は市役所にあった。人それぞれある。それを箱にするかは検討すべきかと思う。案内所であったり、2.5居場所のような3と2の間にあるような場所を作るといいと思う。

加藤会長：イメージが膨らんできた。犯罪とかいろんなことから考えられることはあるか。

中西委員：ニーズを満たした結果、犯罪の温床になってはいけない。照明があって、Wi-Fiが繋がって、大人がいなくなると夜中でも子どもは集まる。そこでよろしくないことが行われる。完全にニーズを満たしてしまっているのかどうかと思う。大人がいなくなると楽しい、好き勝手できる。だが、そこで夜中集まって何をするのかという話になると思う。

鈴木委員：心のよりどころは大事である。自分が中高生のことを考えると、自分だったら何かに向かっていく時に「自分の夢をかなえる」、「そこに行きたいな」が大事だった、居場所になっていたと思う。先ほどの高校生のお話では、市役所に来ることが居場所になった。アンケートにあるように夢を持っているお子さんにとってはいろんな場所があると、そこに行けるのかなと思う。あと夢を探しているお子さんにもいいのかなと思う。

加藤会長：次の課題。子ども達の第三の居場所について。

#### 【居場所づくりの質疑応答】 山下職員説明

林委員：「第三」という言葉、第一、第二の居場所がない人には第三はないと思う。第一第二の居場所がある子について第三なのかなと思う。居場所作りに他に何か上につくものがあるのか。場所のハード面と、子どもがひっかかれる、とっかかれたりするソフト面。ハードとソフト平行して考えるといいと思う。第一、第二の居場所が小中でない子も、教育委員会でもULTRAやネットで繋がられるアセスメントもある。公立の小中も、いろいろな外部と繋がって居場所を見つける、やりたいことを見つけることを積極的に行っているところ。両面でやると充実する。

加藤会長：重用な指摘。第一の居場所がない人、例えば家庭がない人には、第一の居場所

も保障する。あるいは学校に居場所がない人については、学校に行けない子どもたちの学びの場をどう保障するかということと、最後にそれを総合した第三の居場所。こういう視点が大事ではないかということだろう。

川島委員：小中学校に行っていない人も来る。その子どもたちがどうやって生きていくのか。セーフティネット的にどうサバイブしていくかが問われている。この町で自分が役に立っているというような、学校ではなく、自分の自己肯定感、やりがい、生きていく術というところを知るきっかけとしての情報を繋ぐところは大事な部分である。リアルなキッズニア、鎌倉市全体が生きる場所になれるようなコーディネーターがあると良い。

幅委員：私の長男も色々と苦労した。鎌倉市の相談員の方が親身になって話を聞いてくれた。第三者に相談する、第三者にも自信をつけさせてくれる言葉をかけられること、その目覚めが今に実を結ぶ。非常に自分に自信を持ちながら仕事に取り組めるようになった。きっかけは大事。居場所がない子にとってはその居場所に行くことすらも勇気がいること。そのきっかけは箱ではなく心のよりどころ。自分を認めてくれる場所、いろいろな世代の意見を聞けるところが大きいと感じる。

若木委員：この方針案から「第三の」という言葉を削除したらどうか。青少年の居場所づくりという方がすっきりすると思う。

加藤会長：大きなテーマとして、子どもたちの居場所は学校と家庭が殆ど、それだけで満足なのかも一つ求めているのではないかということで「第三の」とアクセントを置いた。思い切って居場所としたほうが、「第三の」と言わず言葉の中で説明していけば。

小林課長：一般的に今第三の居場所とはあちこちで聞かれている。第一、第二があるという議論を飛ばして、家ではない、学校ではない、別の場所。子どもだけでなく大人にとってもサードプレイス。一般に使われている言葉だったので安易にとびついてしまった。国でも表現されている言葉だった。今の議論を受けて、そこに固執する必要はあるのか、もう一度再検討してみたい。子ども、若者にとっての居場所、十分伝わり、表現できるのであれば、あえて第三とつけなくても。

石井委員：大賛成。一般に「第三の」と使われているので、なんとなく違和感なくきていたが、皆さんの意見を聞いてなるほどと思っている。

加藤会長：国が明確に「第三の」と使っている。鎌倉市は第一の家庭が満たされない子どもたちをどうやって家庭をフォローしていくかも含めて、或いは学校はこれでいいのか先生たちも含めて考えていく。第三は地域。地域の中でどんな場所が出来ていくか。三つを総合してもう一回、居場所を鎌倉市で青少年に用意していくという形にしていくことはありがたい。

若木委員：第四の他課事業の紹介を是非やってもらいたい。もっと幅広い目でいきたい。

平野さん：居場所を持っていない子と持っている子を配列した時、自分は持てる人間。持

てている子でも第一と第二では補完できないところがあったり、多数の視点を消してはいけない。優先は第一、第二、でも第三も並行してやっていただきたいというのが居場所を持つ人間として思っている。第一、第二の子が大多数によっていくのも必要、第三の人が補完できないことにもよっていくことが大事だと思う。お互いが寄り添える方がいい。第三を並行して考えていく、どこか頭の片隅に残していくのは重要だと思う。

加藤会長：鎌倉市はかまくらっ子がある。これは第一、第二、第三をくつつけたよう形。家で子どもを見られない子、学校に慣れない、障がいのある子も、普通の子も来ている。そこに地域の方も参加している。不思議な空間になっている。見ていて低学年では見事にうまくいっている。これは中学生高校生でも出来ないか、夢がある。それも含めてこれから課題も出てくる。そこに中学生は遊びにきたり、手伝いに来る子もいる。その子が来ると、どんどん変わっていき、青少年が成長していることも報告されている。

林委員：居場所の前に、三つ目ではなく、「もう一つの居場所」のような修飾語が考えられるといいと思う。第一、第二の中でも補完したいものがあるのも確かな視点。学校に行けない子も何か持っているかもしれない。他にあるよ、というような修飾語がつくといいと思う。

加藤会長：他部署との連携、青少年課だけでなく。例えば、農業や、自然環境など、鎌倉市全体でできるといい。

川島委員：心身が休める、茶屋のような、安心して休める場所も必要、並行して考えていくといいかなと思う。

加藤会長：安心して休める場所がキーワード。ゆっくり何もしなくても、そこに行くと落ち着くような場所があると子ども達は喜ぶと思う。このような場所が鎌倉市のあちこちにちらばっているといいと思う。例えばそこに小さな図書館があったりしても、一つの居場所になると思う。そんなことを大事にして、鎌倉全体での居場所作りをしていきたい。

千代委員：保健室のようなところかなと思う。保健室を増やしすぎると、逃げ場になってしまふところがあるかと思う。けれども、安心して過ごせる、時間もつぶせて、話し相手も相談に乗ってくれる人もいるイメージがある。町の保健室を地域で作ろうという動きがあったりする。対象は地域の方々、お子さんも含めて町の保健室に行くとはんわりできるといいと思う。

加藤会長：鎌倉市全体に広げていく。鎌倉全体が一休み出来る、ホッとできる色々な居場所がちりばめられている、そういう町にしていきたい。そんな街づくりをしていくきっかけとして、子ども達の居場所作りを始められたらいいと思う。

加藤会長：趣旨を議事録としてまとめて次回第3回以降（1月下旬から2月）に繋げていく。

以上